

コロナ禍のなかの医療者

中山 昌明*

コロナ禍のなかで医療者がまさに体を張って医療行為にあたる姿を見て、改めて気づかされたことがある。医療の発想は一般社会のそれとは基本的に違っているという点だ。極論するなら、利己的な現実世界のなかでの利他的な医師や医療者の行為は、世間一般の常識とは大きくかけ離れている。これに気づいたとき少し興奮した。利他的であることは、かなり精神的、哲学的、そして宗教的であるように思う。自分の身が安全という保証もない状況のなかで、他人のために貢献する医療者は、世間から見たら奇特な人々、特別な思想をもつ人々、まさに聖人(?)に見えるかもしれない。

こんなことを思ったのは、現在進行形で進んでいる医師の働き方改革が背景にある。私が勤務する聖路加国際病院には多くの若手医師が働いているが、2016年に研修医の時間外の長時間勤務などの業務体制が労働基準監督署から指摘され、以降、多くの業務改革が行われている。私は、「研修」とは自身の研鑽のためにあると考えてきた（古い）人間であるため、「病院に必要以上に長く滞在しないように」という要望を聞いた当初はかなり驚いた。それでは、研修医はいつ研修するのか？ いつまでも学生のままでいいのか？ 適正な勤務時間、ワークライフバランス、業務の効率化、すべて大事であることは理解できるが、そもそも一般社会に求めている働き方改革は医療界にもそのまま実装可能なのか？ それを突き詰めていった場合、どのよ

* 聖路加国際病院腎臓内科/腎センター

うな医師ができてあがるのか？

コロナ禍のなかで福島原発事故・放射能汚染問題を思い出した。当時、私は福島市内の医大に勤務していたが、全く先が見えない不安が渦巻くなかで、医療者の行動が人々に大きな影響を及ぼすことを目の当たりにした。危機のとき、人々は医療者に対して特別な何かを期待するのは本当だと思う。そのことは福島の事例で深く心に刻まれた。

福島原発事故後がそうであったように、今のコロナ禍のなかで、ポストコロナ時代の社会インフラ構築が盛んに議論されている。WEB 会議・学会、遠隔診療、AI (artificial intelligence)、IoT (internet of things) など、昨年までは考えもしなかったことが医療現場でも当たり前になった。医師の働き方もこれを機に大きく変わるかもしれない。ポストコロナ時代の将来、良いものは確実に展開してもらいたい。元の姿に戻るだけが事故・被災後の目標ではないはずだ。そして、そのとき、医療者の姿はどうなっているのか。変わらず魅力的なものであってほしい。